

廢墟からの黄金時代の幻視

Stifter の ≧Witiko≦ における時間構造について

西 脇 宏

I 二つの時間

高橋康也氏は「終りなき終り——文学論的終末論ノート——」において、三〇〇〇年に亘るヨーロッパの文学史を時間論の立場から概観し、その終末論的現象としてのベケットの歴史的 position を鮮やかに照らし出してみせた¹⁾。「聖書からベケットにいたる間に、ヨーロッパの文学は終りある終りから、終りなき終りへと大きく転回した²⁾」とするのが氏の基本的見解である。しかしながら、ベケットをヨーロッパ文学史における一つの遠近法的消点として措定するという、高橋氏のいわば歴史主義的ベケット評価に、方法論的矛盾は含まれていないであろうか。というのもベケットの諸作品は、高橋氏の見事な分析が示しているように、歴史主義的視点の根柢にあって、そのような視点を成り立たせている「終りある時間」の一つの破産宣言であると考えられるからである。

それはともかくも、現代文学（ここに「ヨーロッパの」という限定詞を加える必要があるだろうか？）が逢着している行きどまりの状況を、時間論の立場から解き明かしてみせたのは、何よりも高橋氏の功績であろう。論を進める上で、「終りなき時間」と「終りある時間」という異なった二つの時間構造を表わす用語として、高橋氏が採用したのは、「円環的・永劫回帰的クロノス」と「直線的・遠近法的カイロス」とである³⁾。

本稿は昭和五七年度日本独文学会、中国四国支部会における私の研究発表「Adalbert Stifter の ≧Witiko≦ ——その時間構造についての一考察——」の口頭発表原稿に、大幅な補筆、修正を施したものである。

1) 高橋康也：「終りなき終り——文学論的終末論ノート——」、『ウロボロス——文学的想像力の系譜——』、晶文社、1980、11—41頁。

2) 前掲書、15頁。

3) 前掲書、19頁。

ホメーロスの継起的時間を「クロノス(chronos)」, 聖書的な危機的時間を「カイロス(kairos)」と仮に呼ぶことができるかもしれない。クロノスとは「……」その民族神話に創世紀神話(始め)と終末論神話(終り)をもため古代ギリシア人の時間である。逆に、カイロスとはまさしくそのような神話的両極の間の緊張に自らを置くヘブライ人の時間意識と言えよう⁴⁾。

このように高橋氏は「クロノス」と「カイロス」の二つの時間の淵源を、ヘレニズムとヘブライズムというヨーロッパ文化共同体の二大源流にまで遡って求めている。高橋氏が「カイロス」と名付けた「ヘブライ人の時間意識」は、ユダヤ教の終末論的世界観とともにキリスト教へと継承され、かくしてこの二つの時間は、ヨーロッパの伝統において時間の構造を表わす二つの形象を形成するに至ったのである。例えば神学者の Oscar Cullmann は、ギリシア人の時間の捉え方と原始キリスト教の時間観とを鋭く対立させ、前者にとっての時間を「円環」(◊Kreis◊)あるいは「永遠の円環運動」(◊[das] ewig[e] Kreislauf◊), 後者にとっての時間を「上昇する直線」(◊die aufsteigende Linie◊)あるいは「始めと終りを持った上昇する直線」(◊[die] aufsteigende Linie mit Anfang und Ende◊), と形象化して示している⁵⁾。

しかし私たち、ヨーロッパ文化圏に属さない私たちとしては、汎地球的見地から、「東洋＝仏教的＝転生輪廻の時間」と「西洋＝キリスト教的⁶⁾＝終末論的時間」という図式を提示することも当然可能ではないかと思われる。また、さまざまな観点から、この二つの時間にその他の異なった名辞を冠することもできるであろう。しかしここで問題なのは時間の呼称ではない。況んや時間そのものについて哲学的考察をめぐらすことも、本稿の眼目ではない。私の目指すところはあくまでも ◊Witiko◊ という具体的な文学作品の解釈であり、そ

4) 高橋：同書、16—17頁。

5) Oscar Cullmann: *Christus und die Zeit — Die urchristliche Zeit- und Geschichtsauffassung—*, 2. Aufl., Zürich, 1948 (1945), S. 44f.

6) 旧約と新約の原典言語が示すように、キリスト教自体がヘブライズムとヘレニズムの一つの総合としての性格を具備していることは言うまでもない。教理上の直線的時間把握にもかかわらず、キリスト教がギリシア的円環的時間を完全には克服できなかったことを、Cullmann は「キリスト教のヘレニズム的改義」という言葉で表現している。(Cullmann, S. 49ff.) また宗教学者の Eliade は、キリスト教哲学内部における「二つの時間」の抗争を歴史的に跡づけた後で、以下のように述べている。「一七世紀に入ってから、歴史の直線主義と進歩の観念が次第にあらわれ、すでにライプニッツによって主張された無限進歩の信仰が起り、啓蒙時代において支配的となり、一九世紀の進化論の勝利によって普及した。この歴史の直線視主義への一種の反動と、周期説への関心の一種の復興がはじまるのは二〇世紀を待たねばならなかった。」M. Eliade; 堀一郎訳：『永遠回帰の神話——祖型と反復——』, 未来社, 1963, 185頁以下(引用は188—189頁。)

のための一つの手がかりとして、従来顧みられることのなかった時間論的視点の作品解釈への導入を、ここで試みるにすぎないことを、あらかじめお断りしておきたい。

以下の議論の前提として、時のかたち、時間の構造をめぐる、根本的に対立する二つの考え方が歴史的に存在してきたことが、ここで確認できればよいであろう。そして、本論文で私はこの二つの時間を、それぞれの運動性を表現する言葉を添えて単純に、「回帰する時間」および「発展する時間」と呼ぶことにしたい。

さて本論に入る前に、ここでこの小論全体の簡単な俯瞰図を示しておくことにしよう。まず次章において、*Witiko* の構成に対する考え方の二つの大きな流れが要約、紹介され、そのいずれもが「発展する時間」を前提とした解釈であることが示される。次に、従来の解釈の批判的検討から、*Witiko* が根本的には「回帰する時間」に規定されているのではないかとする私の仮説が生まれ、その仮説の妥当性が主張される。そして最後には、「廃墟からの黄金時代の幻視」という私の *Witiko* 解釈の帰結点が示されるであろう。

私の主張は、従来の *Witiko* 像の根本的改変を含んでおり、あまりに論争的にすぎるかも知れない。またその論証のためには、より広範で、より詳細な実証的裏付けが必要なることも充分承知している。したがって、私の主張はあくまでも一つの仮説にとどまるであろう。以下の論述が *Witiko* 解釈における一つの問題提起となるならば、この小論の所期の目的は達せられたと言えるであろう。

II 「個人の発展」か「歴史の発展」か

Witiko は Stifter が生前に完成することができた最後の作品であり、作家が物したただ一つの「歴史小説」⁷⁾ である。郷土の中世史に取材した歴史小説の立案以来、ほぼ二〇年の歳月を経て漸く完成されたこの作品は⁸⁾、その素

7) *Witiko* の属する文学ジャンルについてむずかしい議論のあることは、私も承知している。ここでは文学ジャンル上の用語としてではなく、単に「歴史的事実を背景に展開される物語」位の意味でこの単語を使わせていただく。

8) *Witiko* の成立史については諸家の研究に詳しいので、ここで再述することはしない。私の関した最も詳細な実証的研究は、Enzinger のものである。Moris Enzinger: *Stifters Weg zum Geschichtsroman und der Plan zum >Zawisch<<; >Der Plan zum >Wok< und die Rosenbergertrilogie<*, in: M.E., *Gesammelte Aufsätze zu Adalbert Stifter*, Wien, 1967, S. 219-254.

材の内容、規模の点で、あるいは単に紙数の上からでも、「詩的な風景画家」⁹⁾ Stifter の全創作中、文字どおり最大の作品となっている。

》Witiko《 のような浩瀚な作品に対しては、まずもって物語全体の構成をどのように把握するかが、作品解釈に決定的な重要性を持っている。歴史小説 》Witiko《 における「主人公」Witiko 個人と、超個人的歴史との関係をどのような観点から捉えるかによって、作品全体の構成に対する考え方も、おのずから以下の二つの立場に大別することができる。

- 1 「主人公」Witiko 個人の発展が作品の構成原理であると考える立場。
- 2 超個人的歴史の発展（もしくは歴史の発展と Witiko 個人の発展との調和的並存）によって物語全体が規定されていると考える立場。

つまり第一の立場は、個人と歴史の関係を個人（主観性）の側から捉えようとするものであり、逆に第二の立場は、両者の関係を歴史の大きな流れ（客観性）の中で捕捉しようとするものである、と要約することができるであろう。そして、図式的単純化との批判を恐れずに敢言すれば、従来の 》Witiko《 解釈（それも私の関し得たのはごく限られた範囲のものではあるが）が採用している作品構成に関する見解は、如上の二つの立場のいずれかに分類、整理できるのではないかと思われる。

ではまず第一の立場から検討してみよう。「主人公」の生涯とともに歴史を追体験しようとするこの立場は、おそらく一般読者が伝統的な歴史小説を読む際に取りる態度であろう。しかし、次から次へと緊迫した場面を連続させ、読者と「主人公」との同一化を可能にするといった歴史小説の常套的手法は、そもそも 》Witiko《 では見られない¹⁰⁾。また作品評価に関して付言すれば、後述するようにこの立場からは 》Witiko《 の構成の首尾一貫性が理解できないので、》Witiko《 に対して積極的な評価は生まれる余地がない。Stifter の歴史小説理論や、》Witiko《 執筆に際しての作者の意図¹¹⁾ を知りうる Stifter 研究家の中

9) Ursula Naumann: *Adalbert Stifter* (Sammlung Metzler Bd. 186), Stuttgart, 1979, S. 46.

10) Cf. Nauman, S. 50.

11) Stifter の歴史小説理論や 》Witiko《 創作の意図は、いくつかの手紙の中で述べられている。彼独自の歴史小説観を展開したものとしては、一八六一年六月八日付 Hekkenast 宛の手紙がある。そこには以下のような言及がみられる。

Es scheint mir daher in historischen Romanen die Geschichte die Hauptsache und die einzelnen Menschen die Nebensache, sie werden von dem großen Strom getragen, und helfen den Strom bilden.

Adalbert Stifters Leben und Werk — In Briefen und Dokumenten —, hrsg. v. Kurt Gerhard Fischer, Frankfurt a. M., 1962, S. 476.

で、現在直截にこの見解を主張する人は稀であるが、例えば Rudolf Wildbolz はその数少ない一人に数えられるであろう。

Die für das Werk entscheidenden Vorgänge spielen sich in Böhmen und Mähren und in angrenzenden Räumen bis Wien ab. Wo der Erzählstrom diese Grenze überflutet, verläuft er sich im Konturlosen. Der scheinbare Raumzuwachs wird zum Konsistenzverlust. Schon der Titel weist deutlich genug auf den Kern, auf den Aufstieg des anfangs namenlosen, aber hochgemuten Jünglings Witiko, der zuletzt »Zupan von Prachem, Heerführer, Gesandter und oberster Truchseß des Königreichs Böhmen« ist.¹²⁾

「昌頭で、意気軒昂ではあるが無名であった若者 Witiko の栄達」は、なるほど物語を貫く最も太い縦糸ではあるが、Wildbolz はそれを Witiko の個人性の発展、彼の自我拡張として捉え、そのことにのみ作品解釈の遠近法を固定してしまっているように思われる。そのために Witiko を中心点としない出来事（例えば Barbarossa のイタリア遠征）が描かれている必然性は当然了解不可能となり、「みせかけの空間拡大」として物語の一貫性を阻害する作品構成上の欠陥となってしまう。

啓蒙主義以降のヨーロッパ近代における個人性の概念を、»Witiko« の中世世界に無前提に適用することの妥当性そのものが、大いに疑問のあるところである。»Witiko« における登場人物は、自律性 (Autonomie) を持った存在としてではなく、むしろ「事物」(»Ding«) の概念に包括される客観的現実には帰属する存在として描かれていると考えられるからである¹³⁾。

そして »Witiko« においてその客観的現実の秩序を規定しているのは、「正義の法則」(»Rechtsgesetz«) であり「道徳の法則」(»Sittengesetz«)、つまりは『石さまざま』(»Bunte Steine«) の「まえがき」(»Vorrede«) において表明された「おだやかな法則」(»das sanfte Gesetz«) なのである。

Es hat Bewegungen in dem menschlichen Geschlechte gegeben, wodurch den Gemüthern eine Richtung nach einem Ziele hin eingepägt worden ist, wodurch ganze Zeiträume auf die Dauer eine andere Gestalt gewonnen haben. Wenn

12) Rudolf Wildbolz: *Adalbert Stifter —Langeweile und Faszination—* (Sprache und Literatur 97), Stuttgart, 1976, S. 123.

13) »Witiko« における「個人性」については、拙稿：「»Witiko« における『個人性』をめぐって」、『ドイツ文学論集 15』(1982)、日本独文学会中国四国支部編集、17—25頁を参照のこと。

in diesen Bewegungen das Gesetz der Gerechtigkeit und Sitte erkennbar ist, wenn sie von demselben eingeleitet, und fortgeführt worden sind, so fühlen wir uns in der ganzen Menschheit erhoben, wir fühlen uns menschlich verallgemeinert [... ..]. Wenn aber in diesen Bewegungen das Gesetz der Rechtes und der Sitte nicht ersichtlich ist, wenn sie nach einseitigen und selbststüchtigen Zwecken ringen, dann wendet sich der Menschenforscher, wie gewaltig und furchtbar sie auch sein mögen, mit Ekel von ihnen ab, und betrachtet sie als ein Kleines als ein des Menschen Unwürdiges. So groß ist die Gewalt dieses Rechts- und Sittengesetzes, daß es überall, wo es immer bekämpft worden ist, doch endlich allezeit siegreich und herrlich aus dem Kampf hervorgegangen ist.¹⁴⁾

『石さまざま』の「まえがき」に含まれるこのような歴史哲学的考察は、本来歴史小説執筆のための作家の歴史研究の過程において胚胎されたものであり、「まえがき」が『Witiko』をこそ導入すべきであるとする Franz Hüller の指摘¹⁵⁾の正しさは、『Witiko』成立史の上からも確認することができる。

ここに『Witiko』全体の構成についての今一つの見解が成立する。『Witiko』を Witiko の「個人性」の発展という観点からではなく、「おだやかな法則」という抽象的法則に則った歴史の発展過程として捉える立場がそれである。この立場からは Witiko の栄進ということも、第一の立場とは異なった意味づけが可能となる。それは Witiko 個人の発展、彼の「個人性」の展開としてではなく、何よりも衰亡の危機に瀕している Witiko 一族の再興として、あるいはまた、依然怪しげな異教徒が徘徊しているボヘミアの原始林¹⁶⁾のキリスト教化、開化として、つまり、Witiko を中心とした一つの共同体の成長過程として理解されうるのである¹⁷⁾。

14) Adalbert Stifter: *Bunte Steine und Erzählungen*, Winkler-Ausg., München, 1971, S. 11.

15) Franz Hüller: *Adalbert Stifters ›Witiko‹ —Eine Deutung—*, Nürnberg, 1954, S. 14f.

16) S. Adalbert Stifter: *Witiko*, Winkler-Ausg., München, 1967, S. 54. Cf. Hüller, S. 53.

17) 「おだやかな法則」という「非人間的法則」〔Michael Böhler: ›Die Individualität in Stifters Spätwerk —Ein ästhetisches Problem—, in: *Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 43 (1969), S. 669〕による歴史の自律的発展の前では、近代的意味での「個人性」の発展はあり得ない。しかしそのことは、この立場を取るすべての人によって明確に意識されている訳ではない。例えば、Hermann Blumenthal は、Witiko の栄進が彼の個人性の発展ではないことを認めながら、個人性に対する何らの省察もなしに、なおかつそれを「発展」と呼ぶ自己矛盾を犯している。Cf. Hermann Blumenthal: ›Stifters ›Witiko‹ und die geschichtliche Welt —Studien zum geschichtlichen Bewußtsein und seiner dichterischen Ausprägung im 19. Jahrhundert—, in: *Zeitschrift für deutsche Philologie* 61 (1936), S. 411f.

その共同体は Wladislaw を中心としたボヘミア・モラヴィア王国というより大きな共同体に包摂されており、さらにそのボヘミア・モラヴィア王国はキリスト教信仰に基づく最大の共同体としての神聖ローマ帝国に包摂されている。——》Witiko《における世界をこのように、》der weltliche Herr der Christenheit《¹⁸⁾である皇帝を中心とした神聖ローマ帝国を、その外周円とする一つの階層的同心円として把握するなら、》Witiko《はその世界全体の「おだやかな法則」による発展過程を描いたものである、と考えることができる。第一の立場には構成上の欠陥としか映らない物語の空間的拡大を、「おだやかな法則」による秩序の拡張として必然化しようという点で、この立場は作者の意図により忠実な解釈とすることができるであろう。

さて、今まで述べてきた》Witiko《全体の構成に対する二つの立場を、ここで時間の問題に置き換えて考えてみると、発展する主体が Witiko の「個人性」であるのか、世界全体、即ち「おだやかな法則」に則った「歴史」であるのかという相違はあるにしても、どちらの見解も「発展する時間」の相のもとでの解釈、という点では共通していることがわかる。「終末」であり「目的」であるような一つの Ende に向って直線的に発展してゆく時間は、いわばキリスト教の終末論的時間とすることもできるであろう。事実 Michael Böhler は》Witiko《全体を規定している「おだやかな法則」が、キリスト教の終末論思想によって荷われていることを指摘している¹⁹⁾。Böhler の指摘を俟つまでもなく、「おだやかな法則」が一つの終りに向って方向づけられた目的論的構造を持つことは、Stifter 自身が既に『石さまざま』の「まえがき」の以下の箇所にはっきりと示している。

Wenn wir die Menschheit in der Geschichte wie einen ruhigen Silberstrom einem großen ewigen Ziele entgegen gehen sehen, so empfinden wir das Erhabene das vorzugsweise Epische.²⁰⁾

18) *Witiko*, S. 813.

19) Böhler, S. 666. 》Witiko《の構成に関して第二の立場を取る論者には、》Witiko《における歴史をキリスト教の「救済史」(Heilsgeschichte)と関連づけようとする共通の傾向がみられる。とりわけ, Hermann Kunisch: 》Witiko《, in: *Adalbert Stifter — Studien und Interpretationen: Gedenkschrift zum 100. Todestage*——, hrsg. v. Lothar Stiehm, Heidelberg, 1968, S. 244. を見よ。

20) *Bunte Steine*, S. 11. (イタリック体は引用者。)

》Witiko《 の構成に関する従来の見解、さらには作家自身の言明、それらがあるにもかかわらず、「発展する時間」が 》Witiko《 の時間構造を規定していると考えたことに対しては、私は根本的な疑念を抱いている。勿論、Witiko や Wladislaw, もしくは彼らを中心とした共同体の発展、隆盛までをも否定するつもりは私にはない。ただそれらの発展が、一つの終りによって意味を賦与され、定着化される上昇過程なのか、それとも最終的意味づけを得ないまま、拋物線の軌跡を描いてやがて空しく落下するための上昇なのかが問われなくてはならないであろう。作品構造の問題として、現実の 》Witiko《 の終結部が果して先行する一切に意味づけを与えるような「終り」たり得ているかが、ここで検討される必要がある。

それは実際の終結部である第三巻第四章と、第三巻第三章とのうち、どちらが「終末」であり「目的」であるような Ende としてよりふさわしいのか、という比較に置き換えて考えることが可能である。》Witiko《 における歴史空間を、ボヘミア・モラビア地方に限定するなら、Witikohaus の完成と、Witiko と Bertha との結婚、Wladislaw と Konrad 以下の諸公との和解を描いている第三巻第三章は、それまでの出来事の目的達成点として、明らかに一つの「終り」を意味しているからである。

なるほど前述のように、「おだやかな法則」による歴史の発展という立場からは、Barbarossa のイタリア遠征は必然化される。しかし、そこまで 》Witiko《 における歴史の枠を拡大するのなら、キリスト教国同志の戦い、キリスト教国間の内乱ではなく、丁度内乱を克服したボヘミア・モラビア地方が、Wladislaw の王位授与によって、より大きな共同体である神聖ローマ帝国にはっきりと組み入れられたように、その内乱を克服し、外部の異教徒に対して秩序を確立してゆく過程までが描かれねば、決して真の「終り」とはなり得ないであろう。

その意味では事実の簡単な記述があるだけの第二次十字軍²¹⁾こそは、もしそれが歴史的事実として成功裡に終わっていたなら、まさに理想的な終結部であり得たはずである。歴史の事実を畏敬をもって受容し、それを虚心に描こうとする態度と、それぞれの時代を目的論的構造の中で位置づけようとする歴史観との Stifter における相剋は、既に Hermann Blumenthal が指摘しているところである²²⁾。》Witiko《 の終結部が大変な苦役を強いたことを、作者自身あ

21) *Witiko*, S. 789.

22) Blumenthal, S. 396f.

る手紙の中で告白しているが²³⁾、結局のところ Stifter は、十字軍の失敗という歴史的事実を直視することを回避し、次善策を取ること、つまりキリスト教国間の内乱の終熄としての Mainz の Reichstag を終結部とすることで、自らの歴史観を強引に貫こうとした、と考えることができるであろう。

しかし内乱と和解、イタリア遠征と Reichstag の間には、二〇年以上の歳月の空白があり、両者の間に内的連関を読み取ることは極めて困難である²⁴⁾。さらに執筆時の作家の健康の著しい衰えとも相俟って、一一八四年の Reichstag の描写そのものも、到底 Wladislaw と Konrad 以下の諸公との和解の場面ほどの Monumentalität すら達成しておらず、先行する一切に意味づけを与える終りとしては、あまりに貧弱であると言わざるを得ない。それどころか物語を時間的、空間的に拡大したために、Stifter はそれまでの歴史の発展に逆行し、歴史の発展そのものを疑わせる出来事をも、描写せざるを得なくなってしまう。なるほど Witiko に関しては、終結部の息子の築城に至るまで、発展の上昇線は保持されている。しかし Wladislaw を中心としたボヘミア・モラビア地方においては事情は別である。Bolemil 老人や、Wladislaw の妻 Gertrud といった重要人物の相次ぐ死は²⁵⁾、ボヘミア・モラビア地方にとって、補いがたい大きな損失を意味している。

さらに歴史小説 *Witiko* の中核をなす歴史的事件であったボヘミア・モラビア地方の内乱の終熄、「終り」として、ボヘミア・モラビア地方における「おだやかな法則」の秩序の確立を読者に確信させた、Wladislaw と Konrad 以下の諸公との和解が、決して窮極的なものではなかったことが示されねばならない。しかも今回の反乱には、Wladislaw の弟である Diepold が Konrad 側に加担しているのである。Diepold の裏切りは、それが一時的なものであることが述べられてはいるが、彼がかつて留守の兄に代って Prag を Konrad 軍から死守した当の人物であるだけに、ボヘミア・モラビア地方の将来に暗雲を投げかけずにはおかない。Wladislaw の温情、敵に対する寛容が、結局のところボヘミアの覇権をめぐる過去の内乱 — *ein Kampf der Väter gegen*

23) An Gustav Heckenast, 26. April 1867. *Leben und Werk*, S. 646.

24) *Witiko* 各章の時間範囲を比較すれば、ほぼ四〇年の歳月をその中に収めている第三卷第四章が、あくまで例外であることは一目瞭然である。この意味で、終結部に向けて徐々に強まってゆく省略が、*Witiko* における最も重要な技巧であるとする Hohoff の見解には首肯しがたいものがある。Cf. Curt Hohoff: *Adalbert Stifter — Seine dichterischen Mittel und Prosa des neunzehnten Jahrhunderts* —, Düsseldorf, 1949, S. 188.

25) *Witiko*, S. 790.

die Söhne, der Söhne gegen die Väter, der Brüder gegen die Brüder, der Vetter gegen die Vettern, der Landeskinder gegen die Landeskinder²⁶⁾ — の連鎖を最終的に断ち切ったのではなかったことを、Diepold の裏切りはゆくりなくも暴露している。Bolemil 老人が執拗に主張して止まなかった、王位継承の法則も確立されないままに、こうして内乱の際限のなさ、終りなさが暗示される結果となるのである。

Ⅲ 回帰する時間

》Witiko《 の終結部が、目的達成点という意味での「終り」たり得ていないこと。一つの「終り」と考えられる第三卷第三章で終らず、作家が自らの歴史観に固執したために、かえって歴史の発展そのものを疑わせる出来事が述べられる結果となったこと。「発展する時間」のもとでの解釈が直面する困難は、しかしながら、以上に尽きるものではない。そのような解釈の妥当性を疑わせる最大の障害は、「発展する時間」の遠近法のもとでは》Witiko《 における過去の位置づけが不可能になる、という点にあると思われる。

》Witiko《 においては過去の出来事やエピソードが、形態や内容もさまざまな「物語中の物語」として、物語における現在の中に巧みに取り込まれている。ボヘミアの歴史についての Wladislaw の物語²⁷⁾ や、Heinrich 四世父子の骨肉の争いを語る Agnes の物語²⁸⁾ のように、まとまった分量を持ち、はっきりとした枠づけを持つ独立した物語もあれば、単にたとえ話として引用されるにすぎない過去の挿話もある。》Witiko《 における過去の意味、過去と現在との関係は、これらの「物語中の物語」が構成上荷っている意味を問うことによって明らかとなる。

「物語中の物語」が総体として作品構成上果している役割の考察は、しかしながら、今まで着手されたことがない²⁹⁾。したがってその役割解明のためには、詳細な実証的研究が必要であろう。しかしここでそれを展開することは、この小論の範囲を超えるので、私の結論だけを述べれば、「物語中の物語」の構成上の意味は、何よりもそれが実際の物語で展開される出来事の予知となっ

26) *Witiko*, S. 76.

27) *Witiko*, S. 67ff.

28) *Witiko*, S. 471ff.

29) 個々の「物語中の物語」の構成上の意味は、今までにも検討されたことがある。例えば Hüller は、Wladislaw の物語が全体の物語に対して持つ意味を——無論私とは異なる観点からではあるが——考察している。Cf. Hüller, S. 19.

ている点にあると思われる。選挙による領主の選出に起因する内乱の勃発、ドイツ王の内乱への介入、キリスト教の媒介による和解、——物語の昌頭において「緋色の騎士」(Scharlachreiter)として現われた Wladislaw が、Witiko に語って聞かせる Wladislaw 一世治政下のボヘミア地方におけるこれらの過去の出来事³⁰⁾ は、相似形とも言える酷似した展開を辿って、その後の現実の物語の中で反復される。Witiko による一族再興も、彼がボヘミアの森の指導者として認知されるはるか以前に、Huldrik 老人の物語によって既に予知されていた。管見によれば、この Huldrik 老人の物語にこそ、一〇〇〇ページに垂んとする長編 Wutiko の作品としての核心が潜んでいるので、長文ではあるが以下に全文を引用する。

»Das hat mir mein Urgroßvater erzählt, und ihm hat es wieder sein Urgroßvater erzählt, und so immer die Urgroßväter; denn bei uns sind die Männer sehr alt geworden«, entgegnete Huldrik, »bis auf jenen Urgroßvater hinauf, der gelebt hat, da es hier so war. Und das Land hat Euren Stamme gehört, Witiko, sie haben verschiedene Schlösser gehabt, und haben bald in dem einen bald in dem andern gewohnt. Und wo dieses Häuschen steht, ist auch ein Schloß gestanden voll Pracht. Und das ist tausend Jahre gewesen. Dann kamen kriegerische Männer aus Welschland, und haben ein großes Reich gemacht, und haben die Völker vor sich hergetrieben, daß Land und Leute zerstört worden sind. Da ist auch hier alles zu Grunde gegangen, es ist der Wald gewachsen, als wäre nie etwas anderes da gewesen, und die winterliche Luft ist gekommen und die dürftigen Gewächse. Dann ist einmal nach langer Zeit von Euren Voreltern, die damals fortgeführt worden waren, ein Sprößling namens Witiko mit Leuten von Rom hieher gegangen, hat den neuen Glauben gebracht, und hat von dem Volke, das das Land an sich gerissen hatte, den Wald erobert, und hat wieder Schlösser gebaut, und hat weit geherrscht; denn es ist geweissagt worden, daß immer ein Witiko den Stamm erretten werde. Sie haben Jagdhäuser erbaut, und wo dieses Häuschen steht, ist zwar nicht mehr das alte Schloß voll Pracht, aber ein Jagdhaus erbaut worden. Da haben sie Feste gegeben, und haben des Vergnügens genossen, bis wieder das Unheil gekommen ist, bis wieder alles zerstört worden ist, und bis wieder der Wald gewachsen ist, den man hat reuten müssen, um dieses Häuschen zu erbauen, Nun seid Ihr gekommen, Witiko, wie es in der Weissagung heißt: der reichste Herr des Stammes wird kommen, und Milch und Honig auf dem Buchentische essen, wo dann die silbernen und goldenen Tische stehen werden.«³¹⁾

30) *Witiko*, S. 76ff.

31) *Witiko*, S. 206f.

「いつも Witiko という名の者が一族を救うであろう」という Huldrik 老人の予言は、ひいおじいさんがひいおじいさんから語り伝えられたという、その伝承の形態に含まれる反復性、さらには伝承の内容である Witiko 一族の栄枯盛衰そのものの回帰性、これらによって予知機能を持つ「物語中の物語」の一つの典型となっている。

現在に対する予知であるこのような過去の出来事は、前史、つまり現在に至る前段階として「発展する時間」の構造の中で位置づけできるものではない。それは、過去、現在、未来を一つの遠近法のもとに捉えうるような「発展する時間」が、*Witiko* の時間構造を最終的に決定しているのではないことを意味している。現在が本質的には過去の繰り返し、反復でしかない世界を窮極的に支配している時間とは、「終りある時間」ではなく「終りなき時間」、一つの終りに向かって方向づけられた直線的構造の「発展する時間」ではなく、むしろそれとは対立する、真の終りに決して到達することのない円環的構造の「回帰する時間」ではないだろうか。

Witiko における歴史が神聖ローマ帝国にまで拡大されたために、かえってボヘミア・モラビア地方の内乱の終りのなさが暗示される結果となったことは既に述べた。では Witiko に関してはどうであろうか。

Witiko の再来として、Witiko の「発展」そのものが過去の繰り返しであるにもかかわらず、Witiko が最後までその勢力範囲を拡大し続けることは、それを彼の個人性の展開、自我拡張として捉えることの可否を保留すれば、Witiko 個人の発展が作品の構成原理であると考えた人たちに、一つの有力な論拠を提供しているように思われる。しかしながら、「発展する時間」と「回帰する時間」のうち、どちらが *Witiko* において支配的な時間であるのかは、作家が Witiko の発展の終局に一体何を置いているのか、何をもちて Witiko の発展に最終的意味づけを与える「終り」としているかによっても検証される。

ライトモチーフのように何度も言及され³²⁾、Witiko による一族再興の一つの記念碑的出来事となった築城を、彼の息子が再び繰り返す——父親である Witiko の事業を息子が反復する——即ち Witiko の息子の築城の記述をもって、Stifter は *Witiko* を締めくくっているのである³³⁾。つまり作家は、発展の

32) Cf. Wendell W. Frye: *Tradition in Stiffters Romanen* (Europäische Hochschulschriften Reihe I, Bd. 219), Bern, 1977, S. 38.

33) *Witiko*, S. 877.

終局に新しい世代の反復による発展の回帰、終りのなさを置くことによって、その発展への意味賦与を行おうとしている、と考えることができる³⁴⁾。それは「回帰する時間」による「発展する時間」の意味づけの試みに他ならない。このような試みが可能な世界において、「回帰する時間」が「発展する時間」を併呑してしまっていることは、論を俟つまでもないであろう。

しかもこの「回帰する時間」は、Stifter の今一つの長編作品 *Der Nachsommer* の作品世界において既に支配的な時間であった。

訪問客の歓迎、食卓での会話、庭の散歩等々といった日常生活で無限に反復される出来事が *Der Nachsommer* では儀式として自立的意義を有しており³⁵⁾、Stifter はそれらを偏執的とも言える執拗さで倦むことなく描写している。「薔薇の館」を取り巻く人たちの交流は、年毎にめぐってくる薔薇の花の開花の時期によって決定されていた。この薔薇の花の植物的な反復発生に基づく「回帰する時間」は、冬へと向う季節の冷厳な歩みの中の夏の回帰としての Nachsommer、つまり、死へと歩みつつある年老いた恋人たちの失われた青春の若い世代による回帰という、*Der Nachsommer* の根本的モチーフと切り離すことはできないであろう。しかしそのモチーフの個人性の故に、*Der Nachsommer* において「回帰する時間」は、現実の社会から隔離された「薔薇の館」という、選ばれた人たちの小さなサークルの中でしか展開されなかった。それに対して *Witiko* では、なるほど「馬の世話」や「夕べのつどい」等々の日常繰り返される出来事の描写も依然として散見されるが、主として「回帰する時間」が展開されるのは、もはや個人の日常生活のレベルではなく、超個人的な歴史という壮大な舞台である、と考えることができるのではないだろうか。

Heinrich と Natalie の結婚による家庭生活の獲得が、あくまで「薔薇の館」の閉ざされた小さなサークル内での出来事にとどまるのに対して、*Witiko*

34) *Witiko* においては、個人主義的見地からは及びもつかないほど、「子孫」(*Nachkommenschaft*) に重要性が置かれている。》Was ein Mensch in Demut verrichtet [... ..] ist seine Nachkommenschaft, die ihm bleibt, wie sehr sie auch Stückwerk sei.《 (*Witiko*, S. 189.) そしてそれは、死が個人の生の「終り」ではないとする、不思議に明澄な死の観念と結びついている。》Wenn wir gemach in die andere Welt gehen, die wir weiße Haare haben, so müssen die, deren Scheitel noch dunkel ist, in dem Lande sein, und nach ihnen wieder dunkle Scheitel.《 (*Witiko*, S. 728.)

35) Cf. Emil Staiger: *Adalbert Stifter >Der Nachsommer<*, in: E. S., *Meisterwerke deutscher Sprache aus dem neunzehnten Jahrhundert*, 3. Aufl., Zürich, 1957, S. 189.

の再来は、単に Witiko 一族の再興としてばかりではなく、歴史から隔絶して始源のまどろみの中にあつたボヘミアの原始林の歴史への参加として開かれた意味を有している。このことは、いずれの作品においても重要な役割を荷っている薔薇の花の、それぞれにおける象徴的意味からも明らかとなる。Risach 男爵の青春の思い出とわかちがたく結びついている「薔薇の館」の薔薇が、「薔薇の館」のサークルの閉鎖性、秘匿性の象徴であつたとするなら³⁶⁾、》Witiko《における薔薇、Witiko 一族の紋章である五弁の Waldrose には、何よりも「国々の運命の中に花開くこと」(》daß die Rose in die Geschicke Eurer Länder hinein blühet《) が要請されているのである³⁷⁾。

IV 廃墟からの黄金時代の幻視

「発展する時間」のもとでの解釈の孕む問題点の指摘と、それに対する私の主張の作品に即した具体的展開は、極めて不十分ではあつたが、一応前章までで終了した。残る作業は、》Witiko《が本質的には「回帰する時間」に規定されているとする私の仮説を採用した場合、その帰結として、一体どのような新しい》Witiko《の全体像が導き出されるのかを示すことであろう。

従来の解釈の一つの典型として Curt Hohoff は、以下のような》Witiko《解釈の結語を記している。

In einer Zeit hoffnungsloser Verdunklung der universalen Geisteshelligkeit des Mittelalters überhaupt eigenes Licht abgewonnen zu haben, rückt Stifter der ewigen Wahrheit näher.³⁸⁾

結論的に言えば、私の根本的な問題提起は、Hohoff が言う作品世界における「中世の精神の普遍的晴朗さ」が、その回帰する時間構造において、「希望のない暗黒化の時代」をも潜在的に包含しているのではないか、ということである。

以下において、時間が回帰しなければならなかつた必然性を、》Witiko《創

36) 拙稿：「Die nachsommerliche Zeitlosigkeit und die Zeitlosigkeit des »Nachsommer« — Eine Studie zu Adalbert Stifters »Nachsommer« —」, 『島根大学法文学部紀要 文学科編 第四号—II』(1981), 241頁以降を参照のこと。

37) これが、Bertha との婚約の許しを乞う Witiko に対して、Bertha の父親 Heinrich が提示した唯一の許可条件である。S. *Witiko*, S. 418.

38) Hohoff, S. 195.

作の現場にまで立ち戻って裏付けることにしよう。そのことによって、「正しいもの」「善きもの」が至る所で勝利する作品世界の「黄金時代」が、廃墟から企図された時間の回収可能性の探求として、常に現実の「廃墟」をその背後に蔵していること、つまり、廃墟からの黄金時代の幻視——時間が不可逆である以上、それはあくまで幻視にとどまるであろう——としての《Witiko》の根本的性格が、初めて明らかとなるであろう。

Stifter には Witiko の居城である Witikohaus (=Wittinghausen) に取材した今一つの作品がある。Witikohaus の最後の住人を描いた、『習作集』(《Studien》)に含まれる物語『深い森』(《Der Hochwald》)がそれである。『深い森』における Witikohaus は、まず以下のような廃墟の姿で出現する。

Ein grauer viereckiger Turm steht auf grünem Weidegrunde, von schweigendem, zerfallenem Außenwerke umgeben, tausend Gräser, und schöne Waldblumen, und weiße Steine im Hofraume hegend, und von außen umringt mit vielen Platten, Knollen, Blöcken und andern wunderlichen Graunitformen, die ausgesät auf dem Rasen herumliegen.³⁹⁾

《Witiko》執筆中 Stifter は、『深い森』において歴史を軽率な態度で扱ったことを、ある手紙の中で悔いている⁴⁰⁾。しかし彼の後悔は、果して単に自らの若年の未熟さ、「かの子供っばいふるまい」を恥じるだけにとどまるものであろうか。その中に、現実の廃墟を作品の中で定着化してしまったことへの作家の悔恨を読み取るのは、私の独断であろうか。『深い森』に描かれた廃墟⁴¹⁾こそは、まぎれもなく作家が直面している現実であり、いかに作家が Witiko の発展を麗々しく描こうと、その発展の到達点としての現在の廃墟は否定しようがないからである。作家の眼前にある廃墟は、勿論単に Witikohaus だけではない。人間性の「廃墟」、人心の荒廃もまた、一八四八年の出来事以来彼の眼には覆いがたいものとなった。ある手紙の中で Stifter は、革命の体験が彼を「人間性をめぐる最も深く、最も暗鬱な失望」(《die tiefste und düsterste Niedergeschlagenheit um die Menschheit》)に落し込んだことを述懐している⁴²⁾。

39) Adalbert Stifter: *Studien*, Winkler-Ausg., München, 1966, S. 187.

40) An Gustav Heckenast, 7. März 1860. *Leben und Werk*, S. 458.

41) Witikohaus の廃墟は、画家 Stifter が好んで採り上げた画材でもあった。Cf. Franz Baumer: *Adalbert Stifter, der Zeichner und Maler — Ein Bilderbuch —*, Passau, 1979, S. 34ff.

42) An Gustav Heckenast, 4. Sept. 1849. *Leben und Werk*, S. 228.

また別の手紙では、軟弱な「現今の世界情勢」こそが自らの創作の原動力であると作家は述べている⁴³⁾。

歴史の一つの終局に自らが位置しているという意識は、たとえそれが自覚化されてはいないにしても、何らかの形で作品に影を落さずにはいないであろう。》Witiko《が一見いかにもゆるぎない歴史の発展を描いているように見えながら、否定すべくもない作家の現在位置は、その「回帰する時間」の構造の中で示される結果となっではないであろうか。Witiko の再来による一族再興を予言する Huldrik 老人の物語は、Witiko 一族の黄金時代の回帰の予知であると共に、物語が終った後の未来、即ち、Witiko 一族の再没落をも同時に暗示しているのではないだろうか。

Hebbel の 》Der Nachsommer《 に対する批判をここで改めて持ち出すまでもなく、Stifter の退屈さは周知のところである。》Witiko《 とてつ決して例外ではない。例えば Gundolf はこの作品を Stifter の「年寄りの居眠り」(》Altersnicken《) と名付けて、その冗長さを非難した⁴⁴⁾。しかしながら、極めて少数の人たちに限定されるとはいえ、》Witiko《 の退屈さそのものは認めたとてつ、なおかつそれを積極的、肯定的な作品評価の契機としている人たちもある。》Witiko《 の退屈さの価値に関する価値転換とも言うべきこの転回点を提示したのは、他ならぬ Thomas Mann であった。

Stifter の退屈さに対する Gundolf の反応と対比させて、Dieter Borchmeyer は Mann の態度を以下のように述べている。

Wie anders hat Thomas Mann die Langeweile bei Stifter gewürdigt, wenn er von ihrem förmlichen *Sensationellwerden* spricht, wenn er den Autor des *Nachsommer* und *Witiko* als einen der *größten und ermutigendsten Ehrenretter der Langeweile* bezeichnet. In den Tagebüchern aus der Emigrationszeit wird die *Sympathie mit der >Langweiligkeit< des Werks, dem noble ennuy von stillgroßartigem, leichnährischem und edlem Eigensinn* geradezu als Motiv der *Witiko*-Lektüre

43) An Gustav Heckenast, 17. Dez. 1860. *Leben und Wrk*, S. 464. 現実を直視することを回避し、中世という過去に「逃避」した作家としての Stifter の態度に、時代錯誤性(精神史的見地から)や反動性(イデオロギー的視点から)を指摘し、それだけで能事畢れりとするのは、私にはむしろ安直な批判であると思われる。私があるような立場と距離を置く所以の多少は、既に序論において暗示しておいた。

44) Cf. Emil Staiger: *Adalbert Stifter als Dichter der Ehrfurcht*, Neuaufll., Heidelberg. 1967, S. 35.

angegeben.⁴⁵⁾

》Witiko《の退屈さに対する Mann の共感の由って来たところを、彼の断片的な所感から窺い知することは私たちにはできないが、Borchmeyer は上記の引用に続けて、以下のように推論している。

Und wenn Thomas Mann unmittelbar in Anschluß an diese zuletzt zitierte Bemerkung ganz unvermittelt schreibt: *Er schmitt sich schließlich die Kehle durch...*, so ahnt man, wodurch *Witiko* für ihn so *bewundernswert langweilig* wurde, weshalb er diese Langeweile als >sensationell< empfunden hat: weil er in ihrer Gewissenhaftigkeit anders als Gundolf doch das Grauen vor dem nur hintergründig angedeuteten Katastrophalen und Exzessiven spürt.⁴⁶⁾

「ただ背後に暗示されるにとどまっている破滅的なもの、法外なもの」とは、私たちのこれまでの議論に引きつけて言えば、「回帰する時間」の構造の中で必然的に反復される「廢墟」に他ならないであろう。》Witiko《における「回帰する時間」が、作家の終末意識の無意識の表出であること、Witiko 一族の黄金時代の回帰が、その没落の回帰をも同時に内包したものであることを私たちが知る時、》Witiko《の退屈さはまさに一つの「センセーションとなる」のではなかろうか。

ヨーロッパ文化共同体にとっての、今世紀におけるまさしく終末論的事件であった両世界大戦の直後に、》Witiko《が再発見され、読まれたという》Witiko《受容史上の事実は⁴⁷⁾、この意味で私には極めて興味深いものがある。》Witiko《が、終末を生き延び、瓦礫の中から再生を目指す人たちの心の伴侶となり得たのは、表面上はいかにあろうと、》Witiko《の作品世界もまた一つの廢墟から、一つの終末から産み出されたものに他ならないからではないだろうか。

45) Dieter Borchmeyer: »Adalbert Stifter im Urteil Gundolfs«, in: *Euphorion* 75 (1981), S. 153. 尚イタリック体は原著者によるもので、Thomas Mann からの引用を示している。

46) *Ibid.* 尚 Borchmeyer がここで、『フェウストゥス博士の成立』(»Die Entstehung des Doktor Faustus«)の中の有名な Mann の Stifter 評——その後の Stifter 研究における「風景画家」Stifter の相貌を一変させた——を自らの推論の下敷きとしていることは言うまでもなからう。

47) Cf. Naumann, S. 51.